

1 委員会テーマ 「全ての子どもが運動の新しさを感じ、主体的に学ぶ授業のあり方」

2 研究内容

(1)公開研究授業

期日 平成24年11月7日(水)
授業学級 墨坂中学校3年4・5組「選択」
授業者 大嶋信一郎 教諭
指導者 山ノ内町立西小学校教頭 畠山 正幸 先生
単元名 「ダイレクトシュートを決めろ！(フットサル)」
授業場面(主眼)

三角パスやシュート練習で、ダイレクトでシュートを打てるようになりつつある生徒たちが、ダイレクトでプレーすることが得点をするに有効であることに気づき、ゲームの中で自ら観て、動いて、ダイレクトでシュートを打とうとすることができる。

(2)研究内容

・テーマ設定について

郡研究テーマ「子どもと共に創る授業のあり方」の方向を踏まえ、新学習指導要領の理念である「わかる できる かかわる」も考慮し、体育・保体の研究テーマを「全ての子どもが運動の楽しさを感じ、主体的に学ぶ授業のあり方」と今年度新しく設定した。

・研究委員会について

「子どもが主体的に自分で学べるようにするために」フットサルではどんな授業の展開がよいか、「子ども一人ひとりの学習の意欲やつまずき・理解の仕方などを把握する」ために、実際に体を動かしながら教材研究を深めた。中学校の選択の生徒たちがフットサルを行ったときにどんな場面でつまずくことが予想されるか考えたときに、男女差が話題になった。意欲や技能の面において明らかな差が見られ、墨坂中では男女別に授業を行っている現状を踏まえると、男女別の教材を準備するかどうかは話題になり、研究を進めた。女子には別の教材も視野に入れたが、1時間の授業の展開の中でドリルゲーム的な学習を入れることで同一の教材とした。

・授業に関わって

- ① 1時間の授業の展開の中に認識学習(わかる)場面を意図的に組み込んだ。
- ② 球技(ボール運動、ボールゲーム)における指導内容を戦術学習=ボールがないときの動きに視点を当て、それをドリルゲームで動き方を意識させたり、習得させたりした。
- ③ サッカーの特性をバスケット、ハンドボールなどの他のボール運動との違いからダイレクトプレーに見いだし、授業を展開した。

3 研究の成果

(1)研究授業の様子

男子Bグループ

<実証1>

4 ゴールゲームを行ったことは、タイミングよく空いているスペースに動いて、シュートにつなげることを意識させることに有効であったか。

- ・縦の幅が短いため、シュートに持って行くまでに、相手に良いところへパスを出しても、すぐにカットされてしまい、4ゴールゲームになっていないように感じた。
- ・相手チームは何をやるようとしているのかを知っているため、止められてしまう場面がいくつかあった。そのため、チームの中でさらなる作戦を立てることが大切であったのではないか。
- ・縦の動きが少ない女子には、4ゴールゲームを行うことで、シュートを打つことに有効であったのではないか。

<実証2>

ボールがない時の動きの認識学習」を入れたり、チームごとにスペースを活用する作戦をたてるゲームを行ったりしたことは、戦術的な判断をしてスペースを活用しようとする動きを高めることに有効であったか。

- ・男子はゲームの中でスペースに入り、パスを受けようという意識は持っていた。男子は去年からのサッカーの学習がきちんと身につけている。そのため、「認識学習」はダイレクトシュートを打つまでの流れを再確認することが出来たのではないか。
- ・「わかって出来た」ということを確認していくことが大切である。



(2) 授業研究会から明らかになったこと

- ・技術的な面が発達段階である生徒も自らキーパーを申し出る場面があり、チームでのその生徒の役割がしっかりあった。一人ひとりの子どもが活躍する場が補償されていた授業であった。チーム編成やゲームの組み方等で一人ひとりの役割が明確になるような授業展開を心がけていきたい。それには事前の教材研究や、単元の展開を考えることが必要である。
- ・男女に技術的な差が大きかった。男子は技術も意欲も高く正規のフットサルのルールで学習でも戦術学習＝ボールを持たないときの動きを意識できていた。女子は戦術に対する意識が男子と比較すると低いように感じられた。女子にはよりわかりやすく、やさしい教材を準備してもよかったか。その場合は、主眼も別にした方がよい。一方で、男女共修にし、戦術や意欲のたかい男子が女子に教えたり、女子が学び取ったりしていく授業展開も考えられた。
- ・戦術学習＝ボールを持たないときの動きを認識する場面の後に、ドリルゲームを取り入れた。授業ではドリルゲームの目的を理解していない生徒もいたが、授業に組み込み慣れていく必要性を感じる。

4 来年度への課題

(1) 研究の成果から来年度への研究へつなげる課題

- ・「わかる」時間を設け、それを意識した授業を展開し、「できた」実感を持たせることが「子どもが主体的に授業に取り組む」ことにつながっていくのではないか。

(2) 研究の推進や運営について

- ・今年度の研究体制では月1回しか委員が集まることができない。指導案を書いたり授業を考えたりするのが授業者だけになってしまい、負担が大きくなってしまった。指導案を簡略化し、気軽に授業を公開できる雰囲気や体制を創り出したい。

(3) その他

- ・来年度は、実際に授業で扱った教材を全員で体験する時間を設けたい。その上で、教材の改善点や、授業展開などについて意見を出し合ったり知恵を絞ったりしながら、明日の授業改善に向けて話し合いたい。